

COG2025 応募内容確認書

ID	35-19-2
自治体名	大阪府豊中市
自治体提示地域課題	持続可能な多世代交流の場の創出に向けて
チーム名	チーム水曜2限
アイデア名	オープンマイクイベントのマニュアル化プロジェクト
チーム属性	学生：学生（ ）だけで構成されたチーム
チームメンバー数	2
代表者	西坂 凜太郎
メンバー（公開）	西坂 凜太郎

【確認事項】

- < 応募のPDFファイル名と送付先 > 確認しました。
- < 応募内容の公開 > 確認しました。
- < 知的所有権・肖像権 > 確認しました。問題ありません。

1 アイデアの全体像 (What)

1-1. 全体の概要

オープンマイクとは、誰でも自由にステージに立ち、歌や弾き語り、楽器演奏などのパフォーマンスが行えるイベントである。

プロ・アマ問わず誰でも、当日の飛び入り参加（観るだけの参加も可）が可能、そしてパフォーマンスも短時間（1人5分から10分程度）なことから参加条件がゆるいのが特徴である。これらは単なる演奏に留まらず、あるテーマに基づいてトークや対話をおこなったりするなど、双方向でコミュニケーションを図る装置としても機能し、交流を図ることができる。

これまで大阪音楽大学ミュージックコミュニケーション専攻ではオープンマイクを公園などの公共の場で実施し学生と市民間の交流を図ってきたが、現段階では音大生主体であり学生と市民間の交流に留まっている。

そこで初めてオープンマイクを企画・主催する人、音楽・イベント運営の専門知識がない市民が主体で実践できるようなマニュアルを作成し、市民同士の交流が生まれる市民主体のオープンマイクの展開を目指す。

1-2. 実施内容

オープンマイクの実践を通して、市民が主体的にできるように具体的には「開催に至る様々な準備」、「当日の運営に関わる手順」、「必要な機材」、「人材」、「実践事例やその中で行われた地域課題の解決方法」など様々な事項を記述したマニュアル（以下、具体的な構成内容）を作成する。

作成にあたっては初年度、音大生中心に市民を巻き込みながら地域の祭りや公園、駅前など人が集まりやすい場所でイベントを実施（4回程度/年）し、2年目は、音大生が徐々に市民が主体となるように地域のコミュニティを中心に展開。3年目はさらに地域コミュニティへの展開を図りながら、それらの事例を元に考察をしてマニュアルを作成させる。

【マニュアルの構成内容】

■実践モデル

場所別（学校、寺、病院、商店街、カフェ）にそれぞれ機材、音量、時間、内容、参加者層、注意点を明示する。

■実践までのステップ

- ①場所を決める
- ②管理者・周囲への確認の仕方
- ③日時・テーマの決め方
- ④告知（SNS・掲示・口コミ）
- ⑤当日の流れ（受付・進行・終了）

■当日の進行マニュアル

「何を話せばいいかわからない」を防ぐための様々な対処法を記す。

（記載例）

「開始時のひとこと例文」、「参加者をどう呼び込むか?」、「パフォーマンス後の声かけ例

トークテーマの振り方」、「空気が止まったときの対処法」 など

■双方向・交流を生む工夫

（記載例）

「観るだけ参加者の巻き込み方」、「拍手・リアクションの促し方」など単なる演奏会にならないための工夫を明示する。

1-3. 期待される効果

完成したマニュアルを元に、様々な場所で実践しイベント化することで多世代の交流を深める。

多世代の交流を深めることで、社会課題（地域社会における孤立化、地域（商店街）の活性化、）の解決や包摂的社会の実現に寄与する。

2. アイデアの理由

2-1. 豊中市の推進施策

豊中市は2019年文化庁長官表彰「文化芸術創造都市部門」に選ばれており、創造都市ネットワーク日本の参加団体であり、大阪音楽大学や市民と連携し「音楽あふれるまち」の取組みを進めている。

その内容は、豊中市の第4次総合計画においても「音楽あふれるまち豊中」の推進が荒れており位置づけている。加えて、リーディングプロジェクトとして位置づけられている南部地域活性化構想(2018)において、新たなにぎわいとゆとりづくりの施策として大阪音楽大学との連携や市民におけるアートワークショップやイベントの取組みを推進している。

**文化庁長官表彰「文化芸術創造都市部門」
豊中市が府内初の被表彰都市に決定**

文化芸術の創造性を活用し、地域の特色を活かした文化芸術活動の成果が評価される

文化庁では、文化庁長官表彰に「文化芸術創造都市部門」を設け、市民参加のもと、文化芸術の力により地域の活性化に取り組む、特に顕著な成果をあげている市区町村を表彰しています。

「音楽あふれるまち」をめざした取組、大阪音楽大学、大阪大学、日本センチュリー交響楽団との連携協力や、しょうないR&Kとの協働による創造性の高い事業展開、既にプロフェッショナル定数の文化芸術センターの高度的な運営手法などにより、このほど豊中市が被表彰都市に決定されました。

■文化芸術創造都市 平成27年度（2015年度）の表彰は4都市

産業振興の面でより都市の空間化や発展が課題となる時、政府などでは、文化芸術の持つ創造性を活かした産業振興や地域活性化の取組が、行政、芸術家や文化団体、企業、大学、住民などの連携のもとに進められてきました。このような「クリエイティブ・シティ（創造都市）」の取組は、国内外で注目が高まっています。

文化庁は、文化芸術の持つ創造性を地域振興、観光・産業振興等に積極的に対応し、地域課題の解決に取り組む地方自治体を「文化芸術創造都市」と位置づけ、文化庁長官表彰を平成19年度（2007年度）から行なっています。

■被表彰都市の決定にかかる代表的な取組

豊中市は平成18年（2006年）に文化芸術振興条例を制定し、平成20年（2008年）の文化芸術振興基本方針に続き、平成24年（2012年）には文化芸術推進プランを策定し、「音楽あふれるまち」として取り組んできました。

○**音楽あふれるまちの具現化**

「とよなか音楽月間」が秋の恒例に、「豊中こども音楽フェスティバル」や「豊中まちなかクラシック」など魅力ある公演に富む市内内外からの多くの来場者で賑わいます。

○**大学・アーティストと連携で発展**

市内に立地する大阪大学、大阪音楽大学・同短期大学部や、日本センチュリー交響楽団との協定に基づく連携協力が功を奏し、多様な音楽行事に活気づかれています。

○**創造的な事業の成果**

市民参加型を多様な主体で構成される「しょうないR&K」との協働で開演する市民の主体的な音楽創造が顕著です。

○**文化芸術センターの発展**

既にプロフェッショナル定数の豊中市民文化芸術センター、指定管理業者の民間事業者にオーケストラが連携する事例は、国内の大規模文化施設では稀有なこととして注目されています。

第4次豊中市総合計画

02

前期基本計画

第4章 いまいまと心豊かに暮らせるまちづくり

② 文化芸術センターの活用

文化芸術振興をより一層図るため、市民との協働による文化芸術創造活動の支援や文化芸術を担う人材の育成を推進します。

③ “音楽あふれるまち豊中”の推進

多様な主体との連携事業を展開するとともに、練習や発表、鑑賞の場と機会の充実を図ります。また、音楽をはじめ文化芸術が有する創造性を地域活性化などに活かします。

④ 歴史・文化遺産の保護・保存と活用

本市の歴史や文化遺産などを次世代に継承していくため、文化遺産などの保護・保存を図るとともに、地域資源として周知や啓発、活用に取り組めます。

⑤ 姉妹都市・兄弟都市との交流促進

姉妹都市のサンマテオ市（アメリカ、カリフォルニア州）と兄弟都市の沖積市とは、今後も更に交流を図るとともに、市民間での交流促進を支援します。

市民・事業者の主な取組みイメージ

- 文化芸術活動に参加しています。
- 文化芸術活動を支援しています。
- 歴史・文化遺産の保存・活用の取組みを支援しています。
- 歴史・文化遺産の魅力発信を行っています。
- 姉妹都市・兄弟都市との交流に取り組んでいます。

▲豊中まつり：沖積市訪問
▲まちなかクラシック
▲サンマテオ市姉妹都市交流

【総合計画における「音楽あふれるまち」の位置づけ】

【文化庁「文化芸術創造都市部門」の豊中市プレスリリース】

2-2, 取り組みの実践事例

大阪音楽大学ミュージックコミュニケーション専攻では2020年以降地域の公園や駅前などでオープンマイクを実施しそのノウハウを持っており、学生と市民間の交流が生まれることは実証されている。

そこで、今後の展開として市民主体で市民同士の交流が生まれる展開を望んでいる。



【大阪音楽大学ミュージックコミュニケーションによる地域でのオープンマイクイベントの実践例】

3. 実現までの流れ

3-1. 実現する主体

本プロジェクトを実現する主体は、1年目から3年目にかけて段階的に変化していく。1年目は大阪音楽大学（ミュージックコミュニケーション専攻）が中心となり、企画・運営・進行を担いながら、公共空間でのオープンマイクを実施し、市民演奏者の発掘と関係づくりを行う。

2年目には、市民演奏者が主体的に関わり始め、進行補助や呼びかけ、テーマ提案など一部の役割を担うようになり、音大生（ミュージックコミュニケーション専攻）は伴走的な立場へと移行する。

3年目には、市民が主催者としてオープンマイクの企画・運営を担い、公共空間に加えてカフェや病院、高齢者施設、フリースクールなど多様な場へ展開する。音大生や関係者は必要に応じてサポートを行いながら、市民主体の運営が自立的に継続する体制を構築していく。

3-2. 必要な資源

（ヒト）

全期間を通じて、プロジェクトの中核を担うコアメンバーとして音大生が関わり、オープンマイクの企画、実施、記録を行う。また、市民参加者として、演奏経験や年齢、ジャンルを問わない市民演奏者、および演奏は行わず観るだけで参加する市民が必要である。後者は場の雰囲気をつくり、交流を生む重要な存在である。

（モノ）

全期間を通して、楽器、簡易音響機材（マイク、スピーカー、小型アンプ）、電源（バッテリー、延長コード）といった基本的な機材が必要である。また、受付や進行のための名簿、筆記用具、タイムキーパー用の時計などの備品、活動記録のためのカメラやレコーダーなどの記録用機材も必要となる。

（カネ）

本プロジェクトを継続的に実施するためには、機材の購入およびメンテナンス費、チラシやマニュアルの印刷費、学生および市民の交通費が必要となる。また、会場によっては使用料が発生する場合があります。公共空間や民間施設での実施に備えたイベント保険への加入

も想定される。さらに、活動の成果を記録・整理し、マニュアルとして編集するための記録・編集費も、必要に応じて確保する。

3-3. 実現に至るプロセス

【1年目】音大生主体による実証実験・市民演奏者の発掘

目的：市民演奏者との出会いと関係づくり

音大生を主体としたオープンマイクを、公園や図書館などの公共空間を会場として実施する。月2回の頻度で継続的に開催し、飛び入り参加を歓迎することで、市民演奏者を直接発掘していく。演奏者との交流を重視した対話の時間を十分に確保し、回を重ねる中で繰り返し参加する「常連の市民演奏者」を徐々に生み出していくことを目指す。

【2年目】市民主導への移行プロセスの実践

目的：主導権の段階的な受け渡し

会場は1年目と同様に、公園や図書館などの公共空間を基本とする。これまでに常連となった市民演奏者に対して、進行補助や参加者への呼びかけ、テーマ提案などの役割を少しずつ委ねていく。一方で、音大生は全面的に運営から引くのではなく、伴走的な立場へと移行し、市民の主体的な関わりを支える。このプロセスを通じて、市民が「主催する側」に立つための心理的・実践的なハードルを検証していく。

【3年目】市民主体による多様な場所での展開

目的：場所別・コミュニティ別モデルの構築

市民主体によるオープンマイク運営を実施する。会場は公共空間にとどまらず、カフェ、病院、高齢者施設、フリースクールなどの小規模なコミュニティの場へと展開していく。それぞれの場所の特性に応じて、形式や進行方法、関わり方の違いを検証し、その成果をもとに「場所別オープンマイクモデル」を複数作成する。

さらに、各コミュニティで見られた孤立の緩和、世代間交流などの課題解決につながった事例も記録しオープンマイクの社会的ニーズと有効性も示せるとなおよい。